



カニはどうやって生まれるの

卵から、カニとはちがった形で生まれる

カニは、卵から生まれますが、お母さんガニが長い間、おなかに卵をくっつけたまま育てるところが特徴です。ほとんどのおかあさんガニは、卵をおなかにくっつけて動きまわり、時期がくると、いっせいに海水中に赤ちゃんをはなします。

アカテガニなどは、お母さんガニが体を海水につけ、おなかをぶるぶるふるわせると、卵の殻が破れて、3～5秒の間に、2万～3万びきもの赤ちゃんカニが海に出てきます。

生まれた赤ちゃんガニは、幼生とよばれ、カニの形をしていません。頭が大きいエビのおばけのような形をしています。幼生は海の中を泳ぎまわり、変態とだっ皮をくり返して、小さいカニの形になり、海底でくらすようになります。さらに、だっ皮をくり返して大きくなり、親と同じようなカニになります。

卵から、カニの形で生まれるカニもいる

山の谷川にすむサワガニは、卵を体にくっつけている期間はおよそ1か月くらいで、その間、水の中には入らず、石の下などにいます。卵の中のカニの赤ちゃんは、幼生の期間も卵の中において、小さいカニの形になるまで、お母さんガニに守られて卵の中ですごします。

卵の殻が破れて出てきたカニは、2週間ぐらいの間は、お母さんのおなかの部分にしがみついて育ちます。その間に、やわらかだった子ガニの殻もかたくなり、一人前のカニとして生きていけるようになります。サワガニは、1回に30～70個の卵を産みます。ここまで世話をすれば、おとなになるカニの数は多くなりますから、ほかのカニと比べて、産む卵の数が少なくてもだいじょうぶといえます。(監修 杉浦 宏)

